

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 カバット アダム アイラ

本論文「江戸化物の研究 一草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開」は、化物の登場する草双紙作品を数多く取り上げ、特に化物が創作される背景と実際の過程について丹念に考察したものである。そこで扱われる作品の大半は未だ翻刻されておらず、学術論文としての価値のみならず、黄表紙を中心とする化物関連資料を広く紹介する意義をも有している。なお、本論文は同題で 2017 年 2 月に岩波書店から刊行されている。

論文は六章から成り、「はじめに」「おわりに」および「あとがき」を付す。以下、各章の概要と審査の結果を記す。

第一章「創作」としての妖怪一馬琴作『化競丑満鐘』の笑い」では、都市文化の「妖怪」が商品として意図的に作られ、商業的に売り出されていったことについて、寛政 12（1800）年に刊行された曲亭馬琴の『化競丑満鐘』の分析を通して論じる。読本浄瑠璃の本作品は黄表紙に近い性格を持ち、河童の描写や作品中の妖怪に因んだ言葉遊びが柳田国男に批判された。カバット氏はその事例などから、妖怪・化物から「事実」を探り出そうとする民俗学者と、化物に創意を加えて自らの作品に活かしてゆく黄表紙作者達の立場の違いを強調する。また、本作品の挿絵には「狸が一子川太郎」が豆腐を持つ様子が描かれるが、氏はそれが黄表紙に見られる化物「豆腐小僧」であることを指摘した上で、化物を介した本作品と黄表紙の関係性を説く。なお、「化物」や「化物尽くし」などの用語に関して、審査委員から論文中で定義を明確にすべきであったとの指摘があった。

第二章「初期草双紙の化物尽くしの形成と展開」では、化物尽くしの中心的素材である黄表紙よりも先に成立した草双紙「赤本」「黒本」「青本」について考察する。初期草双紙の時点ですでに、読者を飽きさせないため、諸作品で繰り返し題材となる著名な豪傑や化物をいかに独自の形で描くかに工夫が凝らされていることを論じる。化物退治の名手として後に定着する坂田金平も、黒本・青本の段階まではあまり登場せず、同じ趣向の繰り返しに陥らないよう、金平を滑稽化したり器物・動物を用いて擬人化したりする作品も見受けられる。また、化物退治談においては、豪傑ではなく退治される側の化物が中心的に描かれ、化物が読者にとっての恐怖の対象のみならず、笑いの対象という側面も併せ持っていたことを具体例を基に強調する。本章で示された 11 頁におよぶ表「初期草双紙の化物尽くしの一覧」も、労作として審査委員の評価が高かった。

第三章「黄表紙の化物尽くしの変容」では、初期草双紙の時代を経て、安永 4（1775）年から文化 3（1806）年までの間に刊行された黄表紙について考察する。冒頭近くに前章同様、「黄表紙の化物尽くしの一覧」と題する 15 頁から成る表が示される。黒本・青本では 30 点であった化物尽くしが黄表紙では 66 点に増えることを指摘し、そこでは笑いの趣向に加えて、『御伽百物語』や『百鬼夜講 化物語』など怪談集や化物図鑑として仕立てられた作品が現れ始めることを述べる。また、当時の諺「野暮と化物は箱根から先」に基づく「箱根の先」という異界の設定に着目し、安永 7（1778）年刊の『化物箱根先』

など、黄表紙に描かれる化物の多くが「箱根の先」を住処とすることを具体的に論じる。

第四章「化物尽くしの黄表紙と合成本をめぐって」においては、伊庭可笑作、鳥居清長画の黄表紙『今昔化物親玉』（十丁、刊年不明）を取り上げ、同じ作者・絵師による『化物 世櫃鉢木』（十五丁、天明元年刊）との比較を試みる。両者は内容的には前編・後編の関係にあるものの、あくまでも別の黄表紙として刊行されたのに対し、翌年の『見越入道一代記』（天明 2 年刊）では両者をそのまま合冊し、二十五丁の新しい合成本黄表紙として発売されたことを指摘する。また、十返舎一九画作の『信有奇怪会』（十丁、寛政 8 年刊）と同『化物見越松』（十丁、寛政 9 年刊）の例では、合成に際して作品の順序を逆にした上で加筆や繋ぎ目の部分の改作を施し、二十五丁の合成本『怪談深山桜』（刊年不明）として再編されたことを具体的に論証する。「合成本」をめぐっては、審査委員から「取り合わせ本」との相違点などを確認する質問があった。また、合成本の実際の制作過程や、版元と作者のそれぞれの思惑についても議論が交わされた。

第五章「鬼娘の系譜—化物と見世物」では、安永 7（1778）年に本所回向院で行われた信州善光寺如来開帳において鬼娘の見世物が流行したことを考察の起点とし、『武江年表』、『燕石雑志』など当時の文献における言及を確認した上で、流行の影響として同時期の黄表紙・滑稽本・洒落本等に鬼娘が登場することを指摘する。見世物を描いた挿絵と作品中の挿絵を比較すると、鬼娘の容姿はほぼ一致するものの、時代が下るにつれ、見世物の鬼娘からむしろ般若に近い伝統的な鬼へと容姿が変容してゆくことを明らかにする。

第六章「所帯道具の化物の系譜—化物と擬人化」では、器物を素材とした化物がどのように擬人化されるかについて論じる。器物の原形を崩さない化物からほぼ人間の形に近い化物まで、人間の頭の形から遠い長方形の米櫃をあえて擬人化することの滑稽さなど、具体的な事例を紹介しながら「人間化」の様相を探る。また、器物の妖怪は室町時代の『百鬼夜行絵巻』にすでに見られるが、そこでは器物と動物・鬼などが合体した形で描かれるのに対し、草双紙における擬人化は、道具本来の形を崩さないままなされるという点も重要な指摘と言えよう。

このように、本論文は黄表紙を中心とする草双紙の分析を通して、作者と絵師の工夫によって多くの魅力的な化物が創作されてゆく様子を精力的に叙述している。読者を意識した版元の商業主義的な視線にも目配りがなされ、読者に応じて化物を柔軟に変容させてゆく、いわば商品化とも言うべき動きをカバット氏は重視する。文学作品として、そして商品としての両面から草双紙の化物を網羅的に考察した論文と言える。

なお、本論文は『江戸の化物』（岩波書店、2014 年）や『江戸化物草紙』（角川ソフィア文庫、2015 年）など、本論文以前に刊行された氏の著作をふまえた上での叙述が随所に見られる。その点については複数の審査委員から、以前の著作で触れた用語の定義や化物についての解説がしばしば省略され、説明不足と思われる箇所がある旨の指摘があった。また、草双紙に現れる多くの化物を通覧した点で、カバット氏は新しい視座による文学の相対化の可能性を有し、加えて口頭伝承など非文字資料に現れる都市の記憶や災害の痕跡などの問題にも迫り得るのではないかとの意見があった。いずれの指摘も今後の研究のさらなる進展に対する期待を込めたものと言えよう。

以上の論文審査の結果、本審査委員会は全員一致して、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。